OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伝藤原為家筆『顕注密勘』（巻二・春下）断簡　解題・影印・翻刻
Author(s)	海野, 圭介
Citation	語文. 1997, 68, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68910
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伝藤原為家筆『顕注密勘』（巻二・春下）断簡 解題・影印・翻刻

海野圭介

一

顕昭付注・藤原定家追勘の『古今集』注釈書『顕注密勘』は、川平均氏「『顕注密勘』の伝本おぼえがき」（早稲田実業学校研究紀要11 昭51・12）によって諸本分類の見通しがつけられ、稿者も新たに幾らかの伝本を加え、改めて整理類別し私見を述べたことがある。(1)『日本歌学大系 別巻五』（風間書房 昭56・11）に宮内庁書陵部蔵本（501—672）を底本に志香須賀文庫蔵本等で校訂した翻刻が収められ、以降、基本的な本文として用いられており、後に、『日本古典文学影印叢刊22 顕註密勘』（貴重本刊行会 昭62・9）に中央大学附属図書館蔵本が影印され対校の便がはかられたものの、何れの本文にも依然幾らか不安を遺す部分が存し、誤脱等により底本のままでは文意の通じ難い部分も散見し、読解に困難を伴う場合も少なくはない。

『顕注密勘』には、群を抜く古写本、善本を見出しえないため、テキストの整理、本文校訂などを含めた基礎的な本文の問題に一応の解決を求めるには、今後の地道な校訂作業が要求されるが、先頃、鎌倉期に溯る『顕注密勘』の姿を垣間見せる資料が出現した。『弘文荘敬愛書図録Ⅱ』（昭59・2）に出品され、後に大阪青山短期大学の所蔵となり現在に至る伝藤原為家筆『顕注密勘』断簡・一軸（存巻一・春上）がそれである。大阪青山短期大学蔵本は、早くに京都・竹島清次郎氏蔵本として知られながらも、(2)ごく最近までその実体が明らかにされてはおらず、内容についての報告もなされてはいなかった。近時漸く、『大阪青山短期大学所蔵品図録 第一輯』（思文閣出版 平4・10）に冒頭、巻一・春上・一番歌から巻一・春上・五番歌・顕昭注の途中まで（約三首分の歌・注）の写真一葉が掲載され、伊井春樹氏により以下に記す解題が付された。(3)

顕注密勘　伝藤原為家筆　鎌倉　一巻　天地二八・四センチ

表紙は紺地、緞子菊花織文、見返し金箔押し布目、金箔散らし。内題は「顕注密勘出」とする。料紙は斐紙、天に三線、地に一線の界線が引かれる。神田道伴の極め札は「二条家為家卿 顕注密勘上／古今秘註抄第一 印」「発端歌袖ひちて巻物乙未霜 神田道伴」とする。本文の右端には「古今秘註抄第一春上」とし、以下「袖ひちてむすひし水の」の歌から「桜花春くはゝれる」までの三十三首の注が付される。……〈中略〉……内容はほぼ流布本と一致するが、ただ誤脱なのであろうか、本書では「かすみたちこのめも春の」の歌と注記を欠く。大阪青山短期大学蔵本は現在、非公開であり、その全容を窺うことはできないが、実は、同本は『図録』の紹介以前にも、前所蔵者

のもとに収蔵されていた時点で既に千艘秋男氏によって精査されている。千艘秋男氏「『顕註密勘』の一伝本――竹島清次郎氏旧蔵本の紹介――」（東洋24―12 昭62・12）に全文の詳細な翻刻がなされており、氏の尽力により全文の参看が可能である。

大阪青山短期大学蔵本は伝承筆者を藤原為家とするが、真偽は未詳であり伝承の域に留まる。[4] 鎌倉中期頃の写かと思われ、[5] 現存伝本中最も溯る書写であり、成立時期をさほど隔てない転写として注目される。『顕注密勘』の本文やその形態、伝来過程等を考える上でも貴重な資料といえよう。残念なことに巻一・春上のみの断簡であるが、更に二本のツレを加えることができる。一本は、『古筆学大成24』（講談社 平5・11）に全文の影写と翻刻が所収される個人蔵伝慈円筆『顕注密勘』切・一軸（存 巻六・冬）である。同本は伝承筆者を慈円とするが別筆と思われ、[6] 筆跡や書写形態（紙背や墨罫、等々）の一致から大阪青山短期大学蔵本のツレと認められる。他一本が、ここに紹介する個人蔵伝藤原為家筆『顕注密勘』断簡・一軸（存 巻二・春下）（以下「本書」と称す）である。

本書は、従来未紹介の資料であり、『国書総目録』にも記載が無い。以下に簡単ではあるが、この新出一軸について略改題を試み、本文を提示することとしたい。

二

個人蔵伝藤原為家筆『顕注密勘』（存 巻二・春下）

〔鎌倉中期〕写　一軸

袋綴改装巻子本。桐楓織紋金襴金色巻出（天地28・3cm、全長244cm）、外題なし。見返、金切箔散。料紙、楮紙（消息紙背裏を転用。但し、裏打ち補修されており紙背の消息は判読不能）。和歌1行書、天に3線、地に1線の墨罫を引き、第一線に和歌、第二線に［顕注］、第三線に［密勘］を書く。内題「古今和哥集巻第二」。

識語、なし。神田道伴の極札が附属しており、表裏に「二條家為家卿（古今和哥集第二 春個）（印）」「巻物乙 未霜（神田道伴）」とある。中央に「中院為家卿古今集春下巻物」と墨書した桐箱入。印記、なし。用字、漢字、平仮名。

本書は、消息と思われる文書の紙背に書写されており、天地にそれぞれ三線、一線の墨罫を施している。筆跡も大阪青山短期大学蔵本と同一であり、ツレと認められる。また、大阪青山短期大学蔵本と同じく、神田道伴[7]による極札が附属しており、おそらく江戸中期頃までは一具として伝来したものと思われる。

本文内容は、前掲拙稿に示した類別基準からは、概ね第Ⅰ類とした伝本群（宮内庁書陵部蔵本（501―672）等）に一致する（但し本書の脱落と思われる異同もまま散見する）。

本書と通行流布本との間の細かな本文の異同も注目されるが、最も大きな相違は、巻二・春下・七十七番歌・密勘後半部（『日本歌学大系 別巻五』で記せば「此事極雖無益……」以下約六行）を大幅に欠くことである。他本では当該部分冒頭に「裏書」と注記する伝本群（初雁文庫蔵本、九州大学附属図書館蔵本、等。前掲拙稿では第Ⅱ類として類別した伝本群に含まれる）や、同部分を全く記さない伝本群（中央大学蔵本、国学院高等学校蔵弦之舎文庫本、等。冷泉為相、為秀などの冷泉家関係の比較的素性の良い識語を記す。前掲拙稿では第Ⅲ類として類別した伝本群）も存するが、他の部分の本文の比較から本書とそれらの諸伝本とは系統を異にすると思われ、

現存の『顕注密勘』が二、或いは三系統に分岐する以前の姿を伝えると考えることも強ちに無理とは言えないようでもある。しかしながら、本書は、当該部分に続く八十番歌注をも欠くため、書写過程における大幅な脱落と考えることもでき、巻二・春下のみの断簡であることと相俟って、本書を一瞥しただけで確実なことを指摘するのは困難である。紙幅の都合もあり、他二本を含めた詳細な検討は別稿に譲ることとしたい。

以下に全文を示すが、本書は、摩耗等により判読困難な部分や紙背の墨痕により書影の不鮮明な箇所もあるため、先に写真版で全貌を示し、次いで翻刻を付載することとした。

注

(1) 拙稿「顕注密勘伝本考」(伊井春樹氏編『古代中世文学研究論集 第一集』和泉書院 平8・10)

(2) 『日本文学大辞典』(新潮社 昭25・5)所収の「顕註密勘」の項目(西下経一氏執筆)に「写本は為家筆と伝ふる巻子本(京都市竹島清次郎氏蔵)が最も古いが春部だけの零本である。」と記され、『日本歌学大系 別巻五』所収の久曽神昇氏による解題にも、「大阪の森繁夫氏旧蔵古筆切は鎌倉時代の書写と思はれ、京都の竹島清次郎氏所蔵伝為家筆巻子本一軸(春部)も最も古いものといはれてゐる。」と記されている。大阪青山短期大学蔵本と本書の出現により、春部は二巻共に揃うこととなる。

(3) 『図録』解題には、「料紙は斐紙」とするが、紙背が消息と思われる点をも考慮すれば、緒紙、或いは混ぜ漉きと考えるべきか。同本は、大阪青山短期大学における展観の際に一見したのみであるが、緒紙としてさしつかえないように見えた。内題も「顕注密勘出」とされるが、「顕注密勘上」または「顕注密勘書」とすべきであろう。また、「誤脱なのであろうか、本書では「かすみたちこのめも春の」の歌と注記を欠く」とされるが、該当部分は丁度紙継にあたり、同歌及び注記の欠落は、手鑑等に押す古筆切として切りとられたための物理的な脱落と考えることもでき、その可能性の方が高いように思われる。なお、大阪青山短期大学蔵本は平成五年に重要文化財の指定をうけ、「月刊文化財」(第一法規 平5・7)に指定の経緯が記されている。

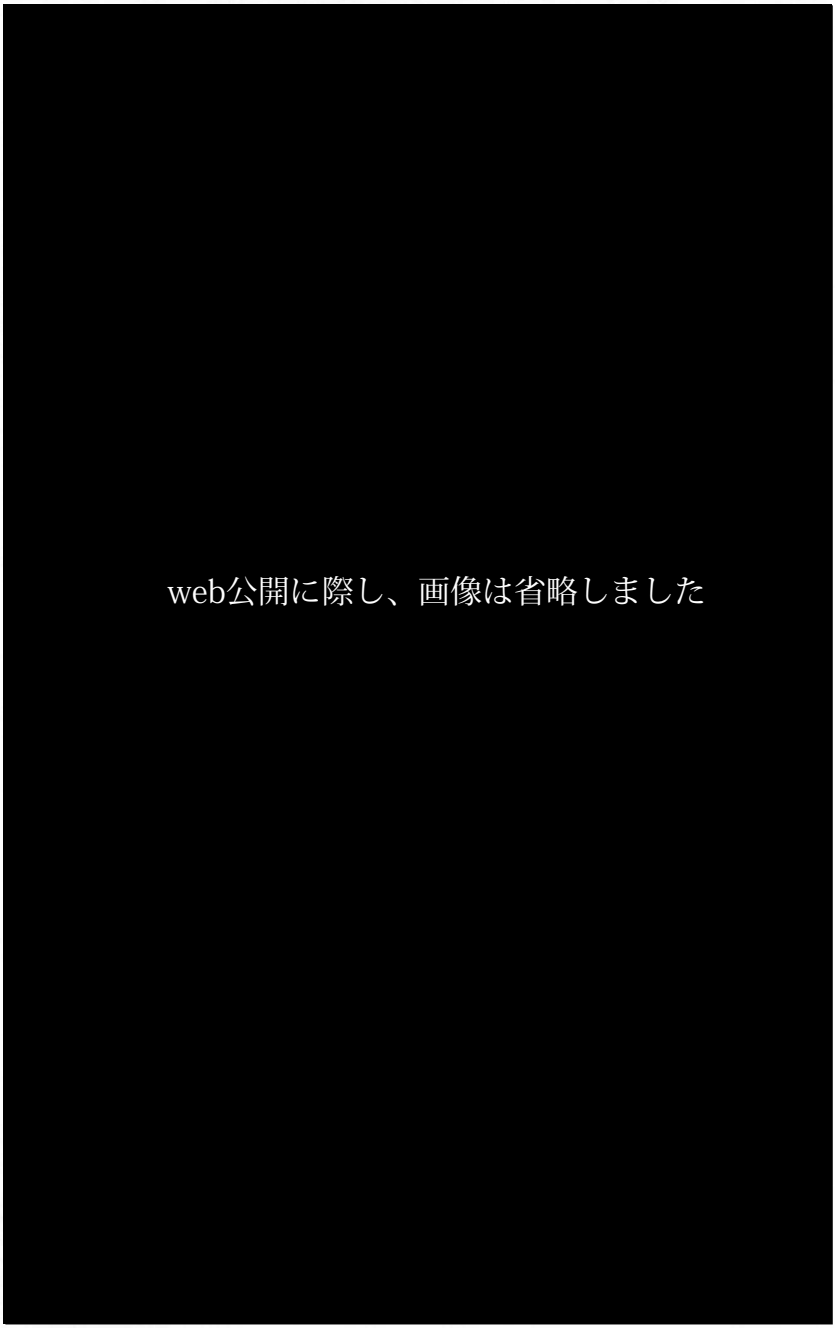
(4) 注3参照。また、古筆名葉集類には、藤原為家を伝承筆者とする古今集注切の記載は見あたらない。

(5) 『弘文荘敬愛書図録II』(昭59・2)の解説では「鎌倉中期写」とし、『古筆学大成24』(講談社 平5・11)解説(小松茂美氏執筆)では同書所収伝慈円筆切を「十三世紀後半の書写であろう」とする。

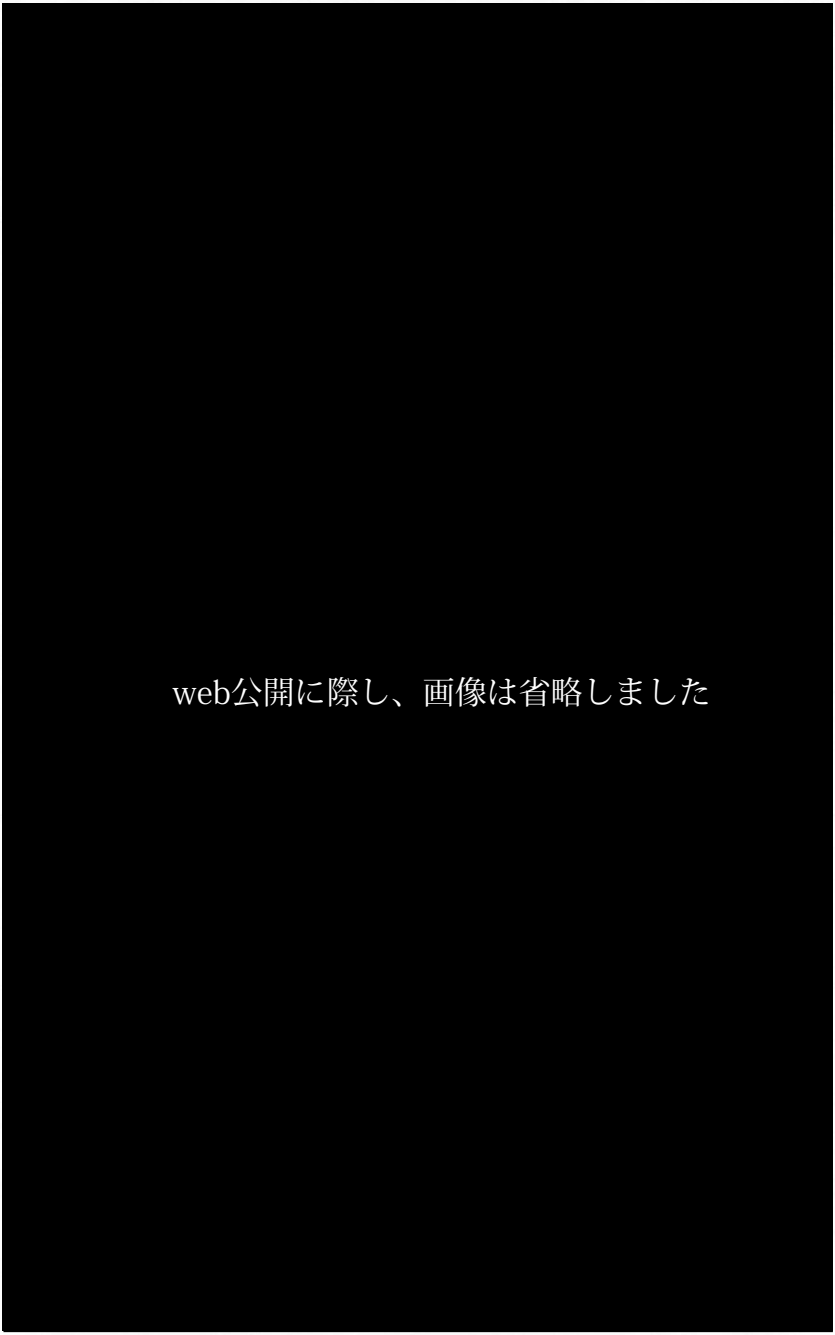
(6) 『古筆学大成24』解説には、同書所収の伝慈円筆切の筆者を慈円とは認められないとし、「十三世紀後半の書写であろう」とする。大阪青山短期大学蔵本も伝慈円筆切のツレと認められ、書写年代は準じて考えることができよう。なお、古筆名葉集類には、慈円を伝承筆者とする古今集注切の記載は見あたらない。

(7) 慶応三年再刊『和漢書画古筆鑑定家印譜』に、「神田道伴/名 定盤/道僖定恒男 寛延二年(1749)十一月十七日没七十二(八イ)」とあり、三代後にも「神田道伴」と同名が記され「神田道伴/初小林了安ト云 弘化四年(1847)自師家神田家相続被申附」とある。附属する極札には「乙未」と記されるので、前者ならば元文四年(1739)道伴六十二(または六十八)歳時、後者ならば明治二十八年(1895)が該当するが、後者と考えるのならば、家督相続の約五十年後となり、没年は不祥ながらも聊か無理があるか。前者とすべきか。

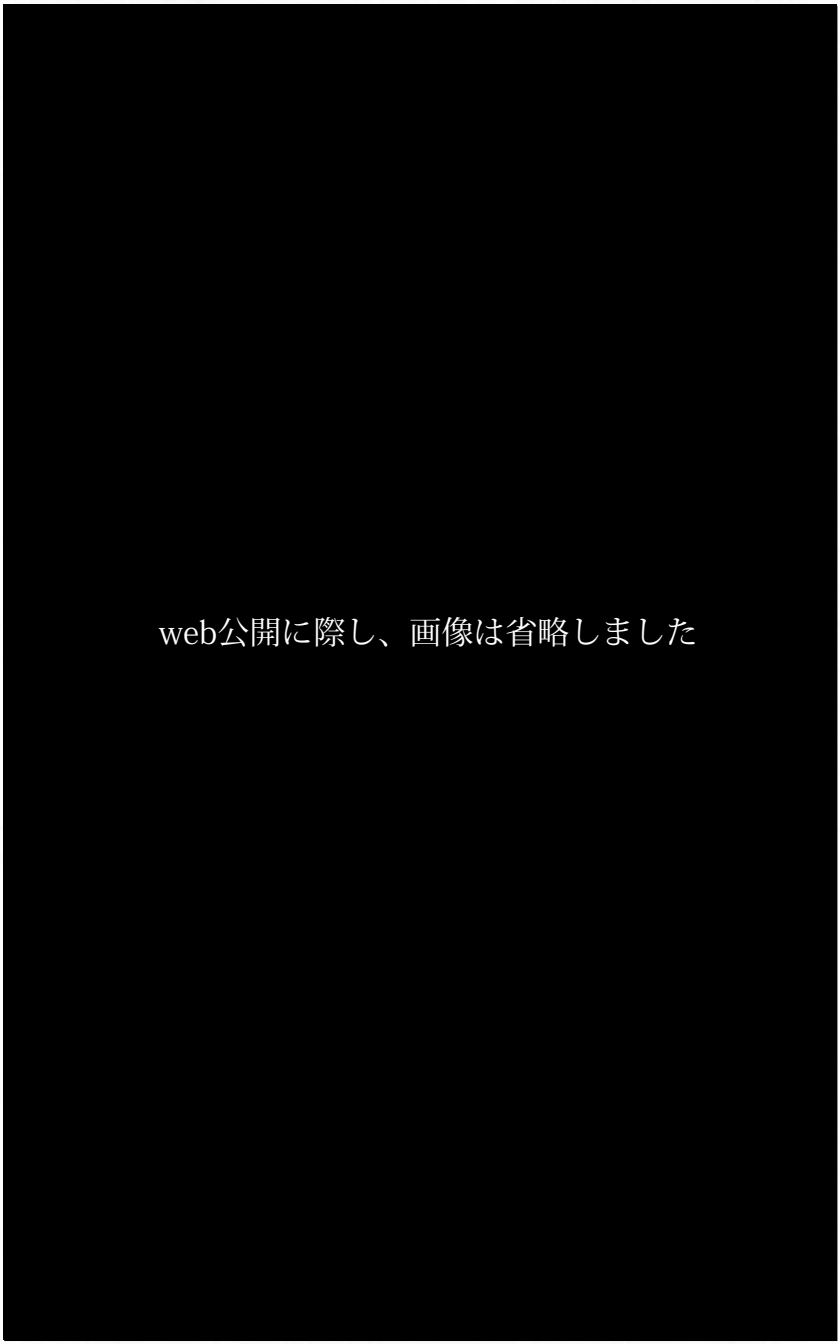
【付記】 最後になりましたが、本資料の翻刻を御許可いただきました個人所蔵者の方、閲覧に際しまして御高配を賜りました片桐洋一先生、下坂守先生にあつく御礼申し上げます。

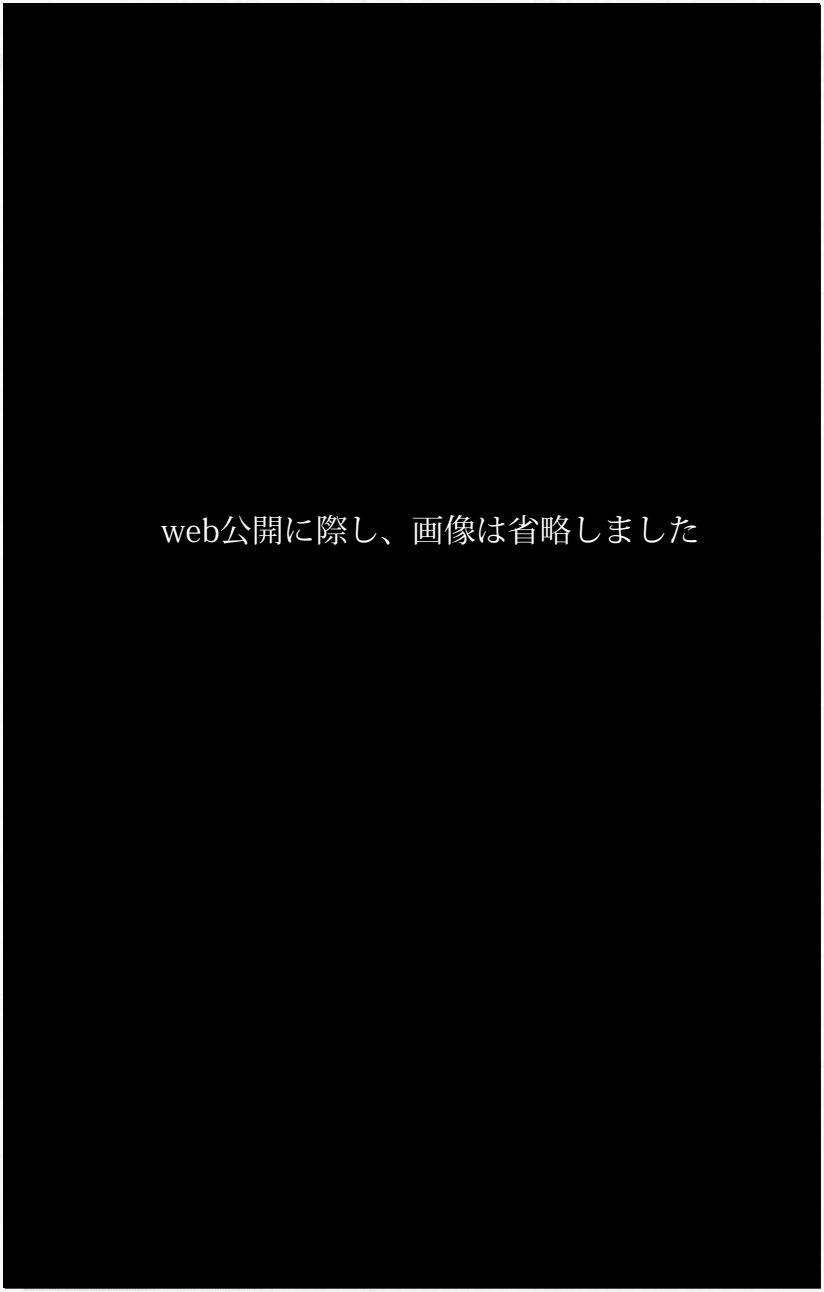

web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました


web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました


web公開に際し、画像は省略しました


web公開に際し、画像は省略しました

〔翻刻凡例〕

一、以下は、個人蔵伝藤原為家筆『顕注密勘』一軸（存 巻二・春下）の翻刻である。

一、できる限り底本に忠実に翻刻することにつとめたが、読解の便を図り以下の措置を施した。

（イ）漢字の旧体・異体は原則として底本のままとし、難字・異体字等には注を付した。

（ロ）底本には句読点は一切付されないが、必要最小限の句読点を施した。

（ハ）翻刻の行移りは底本とは異なるが、和歌、顕昭注、定家密勘の書き出しは底本に倣い、顕昭注を一字下げ、定家密勘を二字下げで記した。また、改行部分は「／」、紙継部分は「」で記し、紙継に際しては紙数を（ ）に入れて付した。

（ニ）摩耗等により判読不能な部分については「［　］」として記した。

一、提出歌の上に『古今和歌集』新編国歌大観番号を付した。

〔資料翻刻〕

古今和哥集巻第二　春下

69春霞たなひく山のさくら花うつろはむとやいろかはりゆく

うつろふと云事は、うちまかせては色の変する也。うつろふ菊と／いふも、白菊の紫になる也。此哥にては散をいふへきかと／みえたり。下哥には、春風は花のあたりをよきてふけこゝろ／つからやうつろふとみむと。此哥も、ちる心とみえたり。心つからと／は、心からといふ也。つはやすめことはなり。かみつ、しもつ、あまつ、おきつ／など、皆、つの詞をくはへたるかことし。よきてとは、のそきてと／いふ詞也。又、よきてはよきるといふ、過とかけり。この一枝／は、よきよといはましとよめり。

花うつろふ事はちるにあらす。さかりなる時にかはりてちり／ぬへき色の付を云也。いつの人まにうつろはむとや、心つ／からや、みなおなし心なり。菊の紫にうつろふにおなし。／梅もさくらもまことにうつろふ也。心つからよきて、詞は一同。」（第1紙）

70まてといふにちらてしとまる物ならはなにをさくらに思ひまさまし

まてといふ、しはしまてと云詞也。

まてと云詞、同此説。やよやまての心もこれなり。

72このさとにたひねしつへし櫻花ちりのまかひに家路わすれて

たひねしぬへしは、たひねしつへしと同詞也。ちりのまかひは、／花のちるまきれと云なり。

ちりのまかひ、又同。

73うつせみのよにもにたるかさくら花さくとみしまにかつちりにけり

うつせみのよとは、○せみのもぬけ也。ぬけからを云也。うつとは虚と／かきたり。むなしといふ義なり。うつせかひと云も、身もなき／かひのからなり。されはむなしきよにたとへたり。花櫻とは、さく／ら花とこそつねによめと、又うちかへし

てよめるなるへし。／菅家万葉集哥拾遺にもいれたり。

あさみとり野辺のかすみはつゝめともこほれてにほふ花さくらかな／但、古哥今題に花さくらと題はいたして、花さくらの花とよめり。さる／さくらの別にあるにや。おほつかなし。但、きぬの色にさくらと」(第2紙)云は、面しろくてうらははなたなるを云。それを花さくらとも／いへは、花さくら同事歟。

うつせみの世又同。花さくらと申花ありと執する人は侍／めれと、此説花さくら、櫻花只同事歟。

75さくらちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにするきえかては、きえかたしと云詞也。すきかてと云も、すきかた／しと云詞なり。

きえかて、所存一同。

77いさゝくら我もちりなむいとさかりありなは人にうきめみえなむいとさかりとは、いとは最也。さかりは盛。普通にはひとさかりとある／を、両証本にいとさかりと侍れは、其本につくへきなり。

最さかりの事、此哥のひ文字の傍にいの字をつけたる／本おほく侍めり。いつこの貴所証本ありとも、短才愚意／は一向もちゐへからす。おほかたはいかなる賢者、めてたき物／をよくも、時にのそみて書失といふ物、ちからをよはぬ事なり。」(第3紙)漢家摺本の形木なとも、いかはかりかはたしかなる人にかゝ／せて、賢者おほくしたるらめと、御府のかた木なしと申／本にもあらはれたる字誤は、かくれなく侍事也。最字を／いとゝ云よみは、事ふりて侍れと、花をいとさかりといひて、」(第4紙)貫之朝臣自筆にかゝむ事、愚もちゐるかたし。つひてのよし○（なき）／事なれと云事の作法、管絃、催馬楽、今様、さま〴〵の／道々作法所作につけて、見よからす、きゝよからぬ事／をも、異説めつらしき事をして、物しりたり「　　」／おもはれむ、心にくからんと、このむ人も侍にや。又、失礼を／いふにかひなくして、我家説と申なす事もあり。まこ／とに仏説をならひつたえ、しらぬ事なき人も、人の目／耳にたゝす、めつらしからぬ事をさきとするも侍へし。／ものをかくに、思わすれかきあやまつ時は、さくら花をほすさくら／花とかき、ほとゝきすをさとゝきすとかゝさるへきにあら／す。あまり思ひよらぬ事は校する時もそらによむほとに」(第5紙)必見おとし侍なり。かく校する人はあやまたす。のちの人の／秘事異説しりたらんは、かならすこれをみつけて悦て、／こやしろに枝さしおほふさくらをほくら花といひ、里なれ／てひさしくなりぬる時さとゝきすといふそと、我ひとり／人丸か説をならひたりと、申さむする時もちゐぬ○（人）侍まし。／よしなき事かきついてに書付侍れと、近比神社行幸侍／き。職者の家のわかき人、求子まはむするとて、あをすりの／ひもはつさて俗人のこたもとゝ申所より、したかさねの／袖をさしいたしてまひし、のこりの舞人その人になひ／きしたかひて、おほくひもをさしさから（な）舞侍にき。／古今の注の中に申ましき事なれと、昔も今も求子／一にかきらす。いつれの楽の舞も、かたぬきたる舞のもと／より手さしいてたるはなき事に侍れと、人にゆるされたる／人は、かゝるめつらしき事をこのみ侍也。昔はものしりたる／人も、よをつゝしみ人にはちてかくは侍らす。難義、

珍事も」（第6紙）をのつからさもやとおもひよそへたる事なきはすくなし。／万葉集、家々の集、代々哥合、ふるき物語の詞なとの／かよひ思あはせられぬ事はありかたく侍なり。最盛／にをきては、いかなる証本ありとも、短慮にもちゐへからす。／但、何事も人のこのみおもはむにしたかふへし。子孫門弟も／此説の、けにとおほえてつかむ人は、又もちゐ給へし。いまはかく／いひいてつる説々なれは、たかひにそねみふせくへからす。

82ことならはさかすやはあらぬさくら花みる我さへにしつ心なし

ことならはと云は、おなしくはと云也。ことはといふも同詞也。かき／くつくしことははふら南ともよめり。さすかやはあらぬは、前々／注畢。しつ心なしは、しつかなる心なしと云歟。

ことならは、しつ心なし、大略同。ことならはとは、かくのことく／ならはと云詞なりとそきゝ侍りし。

84久方のひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ

久方、喜撰式に、月をは久方と云。天をはなかとみといふ。古髄脳／には、そらをは久方と云。万葉には久堅とかき、式には久方とかけり。」（第7紙）月にても空にても、ともにひさしき心によせたる名なるへし。／万葉には久方のそら、久方のあまと、おほくよめり。されは、／そらと云証哥はおほかれと、ひさかたの月とよめるは、そらの月と／いふにやと、物の異名はよよひていふことも侍れと、そらをも／月をも、ともにいふなるへし。ふるくより月を久方とたし／かにいへる証哥は、此集第十八巻、かつらに家侍ける時に、七／条の中宮のとはせ給へりける御返事に、伊勢かたてまつり／けるうた。

久方の中におひたるさとなれは光をのみそたのむへらなる

久方のひかり、そらのひかり、同。

95いさけふは春の山へにまとひ南くれなはなけの花のかけかは

なけとは、なしと云詞也。くれなは花のかけやはなき。そのかけにもね／なむとよめるなり。なけのもみちの夜のひかりかもとよめるも／同心也。又ことのはゝなける物と云も、又、あれはありなけら」（第8紙）のよそにみし人をとよめるも同心なり。世人の詞には、なけな／と云。それをなけなしと云也。哥にはなけらとよめり。

いさけふ、くれなはなけ、又同。迷なむをましりなむに、點／を合て可用之由付之。

101さくら花ちくさなからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる

ちくさとは、さま〴〵のものをそつねにはよめと、櫻ひとつにとり／ても、かれこれをちくさとはよみたるなり。

家本には、さく花はとかきたるうへは不及不審。なにの証／本をももちゐす。家説はことはりのかなひ、哥のきゝ／よき説を執し侍也。但、かの崇徳院御本ときこ／ゆるにも、墨はさく花はとかきて、朱にさくら花を付／たり。朱僻事歟。

102春霞いろのちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

ちくさ、同事也。ちくさとは千種也。千草にはあらす。やちくさとは／八千種也。ちくさの花とは、さま〴〵の木草の花をちくさとも、やち／くさとも云也。ものゝおほかるかすには、やへともいひ、年のひさしき」（第9紙）をはやをとも、やちよとも云也。不及不審。

97春ことに花のさかりはありなめとあひみむことは命也けり

ありなめとは、あらんすらめともと云、同詞也。
ありなめ、一同。

98花のことよのつねならはすこしてし昔は又もかへりきなまし」
（第10紙）
花の年ことにさくを、世のつねとよめる。時は木のつねにはかへぬ心には／あらす。
つねならはと侍こそ叶愚意侍れ。つねなくはと執する人／は心えぬ事也。たとへは、ちる花のことく、つねなくはけふは／ちるとも又帰きなましといふも、心たかはねと、年ころ／ちりしかと、又かくさけは、世中の花のことくつねならまし／かはと云は、おなし事なれと、詞の宣侍也。

109こつたへはおのかはふきにちる花を誰におほせてこゝら鳴覧
をのかはふきとは、羽うつを云也。翥とかけり。もろ〳〵の鳥は、なかむとて／は羽をうつ也。ひるはねうつとそ申。そのはうつ風に花のちる心なり。／夏哥に、さ月まつ山郭公うちはふきともよみ、又うちはふり」（第11紙）ともよめり。はふるとは羽をたゝくなり。万葉にも、うちはふり／鳥はなけともとよむ也。春まちてものかなしきを、さ夜ふけて／はふりなくしきたかたにかすむ。はふりは羽振とかけり。又、／翥と書て、はふるとも、はうつともよめり。花挙也。菅家万葉集／之、紅梅本自作鴬栖高翥花間終日啼〻〻〻。或人うち／はふきは、打任と云事也。うちはへて同事歟云。此義不被甘心古／哥にも不叶。此哥にもたかへり。若菅家万葉集哥に、／鴬のすみし花もやちりぬらんわひしきこゑにうちはへて／なくと侍をおもはれたるか。これは別事也。うちはへてなとは／別詞也。

おのかはふき、家本には羽風とあり。おなし心なれと、今／すこしあらはなり。

111駒なめていさみにゆかむふる里は雪とのみこそ花はちるらめ
こまなめてとは、駒をならへてと云也。駒なめてともかけり。万葉／には、駒並とかけり。こまをうちならへてゆく心なり。こまなめて、同。」（第12紙）

126おもふとち春の山辺に打むれてそこともいはぬたひねしてしか
おもふとちとは、おもふ人ともと云詞也。たひねしてしかとは、たひ／ねをしてしかと云詞也。心はせはやとねかふ心なり。又説に、あはれ／てふことをかれいゐにつゝみもてと云は、かれいゐとはかれいゐなり。／餉とかけり。旅のくひものなり。粮也。駄餉所とて、行幸に／貢御まいらする所也。餉をは、かれいゐをくふともよめり。／俗云、かれいゐは食貢人也。法文云、如餉遠人に云。清涼殿に朝／餉と申所も、朝に強御飯をたてまつるか。俗説にはかたかき」（第13紙）のいゐのつめたくなりて、ひたるをいふ也。かれ御料（レウ）ともいふ也。／粮、糧、同。かて、行所（ママ）（注）糧米也。又儲食也。本哥心は、おもふ／友とも春山に打むれて遊ともの、執（ママ）くはねと、すきてそこ／ともさためす、たひねをせはやとよめり。注哥の心は、／春山の景気花を翫心のあはれなるを、かれいゐにつゝみて／もて、そこともなくたひねせはやとよめり。本哥ともを」（第14紙）いさなふ心、注歌は我心のすきたるにまかする義也。／共にいはれたり。
おもふとち、同。餉の説は、そはにはかきて侍れと、見入沙汰／するにもをよはす。

121今もかもさきにほふ覧橘のこしまのくまの山吹の花

橘の小嶋の隈は所名也。橘の小嶋とも、橘の嶋ともあり。／万葉にもよめり。又、嶋のくなわともよめり。それをとりあはせて、橘の小嶋の隈とよむか。哥枕には河内國に有といへ／り。皇子尊の所名也。遠所七瀬者、難波、農大、河俣摂津、／大嶋、橘小嶋山城、佐久那谷、辛崎近江、然者、河内、山城／相違歟。同名所歟。此哥あり。猿丸集、いろもかもさきに／ほふらんたちはなのこしまのさとの山吹の花。或物に、／こしまのせきと云。

小嶋まことに名所不分明。いかによみたるにか。但、おもふゆへ／侍て、こしまのさきとかきたるを用侍なり。」（第15紙）

（注）『和名類聚抄』（伊勢二十巻本）に、「粮（中略）行所賫来也又儲食也」とある。「賫」は「資」。